

一心寺かわら版

第六十号 令和六年一月発行



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。
旧年中は護持運営にご協力いただき誠に有難うございました。ロシア・ウクライナ、イスラエル・パレスチナ、争いは絶えることなく、温暖化による気候の変動、ウィルス感染など、不安は尽きません。世の中安穏なれと願いつつご一緒にお念仏しましょう。本年もよろしくお願ひ申し上げます。 南無阿弥陀仏



仏教講演会報告

新型コロナによる自粛も終わり四年ぶりの開催。第一部は長倉伯博氏による講演「悲喜に寄り添うー医療と仏教の協働の経験からー」。

自ら「病院にいる坊さん」という長倉先生。一九八一年に浜松市の聖隷三方原病院にできたホスピスの中心を担ったのが原義雄医師。その原先生から三十五年ほど前に薫陶を受け、活動を開始されたそうです。ホスピスは、終末期患者の痛みや苦しみを軽減して、快適さと生活の質(QOL)を優先することを目指します。仏教ではビハラ(サンスクリット語で「精舎・僧院」「身心の安らぎ・くつろぎ」)活動と呼んでいます。

当初は病院にお坊さんなんて縁起でもないと思われましたが、ねばり強く通い続け、医療者、患者やその家族と信頼関係を築き、病院での看取りに携わられるようになりました。

「わたしはまだ死なんぞ。坊主に用はない、帰れ」と言う七十二才の女性。また来てくれと言っているらしいのですが、何度行っても悪態をつくだけ。来ない方がいいのではないですかと聞いたたら、「来るなどは言うところんとの返事。ご主人は太平洋戦争、硫黄島から帰ってきたものの、間もなく亡くなります。それから子育てと結核を患っていた主人のお父さんの世話で苦労されました。今は余命わずか不眠で苦しんでいます。娘さんが嫁ぎ先の広島から遠く鹿児島まで来て世話をしてくれています。病気は同じでも、それぞれに違う人生の物語があります。」

ある日、また呼ばれていくと、私に倒れかかって「ごめんなさい、私ひどいですよね。でもいつもあなたを待っていました。あなたは何を言ってもまた来てくれる。あなたに何を言っても良かったから、他の人たちにやさしくできました。今は何のお返しもできませんが、お浄土に帰らせていただくことがあって仏さまに成らせていただいたら、先生を護りたいと思います。お世話になりました。お念仏は亡くなるまでの人生を力強く生きていく教えです。」

もう終わりだと沈んでおられた末期癌の男性。お正月に家族を集めて人生最後の話をしたらどうですかと提案しました。無事に正月を迎え、子や孫を寝ていた仏間に一人ひとり呼んで声を掛けていかれました。間もなく亡くなりましたが、悲しい



けれど妙に明るいお通夜になりました。子や孫がお互いに、私にはこんなことを言ってくれたと報告し合っていました。みんなに、これからも向こうから見ているぞと話されたそうです。人生を生き切ったその姿を見て力が湧いたとご家族がおっしゃられました。

覚悟が必要ですが、こういうことをやっていく必要もあるのではないのでしょうか。本当の終活は残された人たちが前を向いて再出発できるように、精一杯の生き方を、死に方を見せることだと語られました。

余命わずかの五十四才の男性。こういう状況になると自分の人生を振り返り、つらい思いが出てきます。若い頃に捨てた五才の子供が結婚するという話が耳に入り、こっそり見に行きました。この子に何もしてやれなかったと深く後悔したそうです。「死んでからいいところに行きたいから来てもらったんじゃない。私は地獄に行かないといけない、こういう人間ですから。でも、誰かに私の話を聞いてほしかった」とおっしゃられました。

人は自分の心の中の思いを話すことができたら楽になります。一番つらいのは誰も自分の気持ちを分かってくれないこと。自分の気持ちを分かってくれる人が一人いるだけで楽になります。

医者には話せない、家族にも話せないこともあります。そんな時に何でも話せる第三者が必要。それがお坊さんなら死についても話ができます。ただ傍らにいる、ただ話を聞くだけがいい。私はゴミ箱、私に思いをぶつけることによって前を向ける、家族と医師と一緒に人生に立ち向かっていく。そういう存在でありたいと語られました。

第二部は介護福祉士でもあるシンガーソングライター・かんのめぐみ氏によるコンサート。自作の一曲『教えて遅れ』をご紹介します。

「聞いていたんだ 月に話してた冬 昨日のこと昔のこと あんたのこと 少しだけ迷ってるんだあたしも 同じ冬 時代を駆け抜けてもまだ追いつ



越せそうにはないから 教えておくれよ 正しいことばかりがまた全てを決めつけるの 新しい人よあなたなら 愛を作ってゆける 探してたのか 風が気持ちいい冬 変わる街に身を寄せては あの人を思いたくなる 待っているんだあたしも そんな冬知らぬものに気を取られて 離ればなれになる前に 教えておくれよ 当たり前だという壁が 二人に襲いかかる かわいげな人よあなたなら 愛を作ってゆける 一つのたとえよ ひらめけ 答えは探すもんじゃない いくつもの今を作って そうそれだけ認めておくれよ 知れば知るほどに 世界は小さくも大きくも これからの人よあなたなら その先を見つめれる 教えておくれよ 幸せなあの日のことを 悲しさに負けた日も 隣りにあの人 がいたから 私は強くいれた あなたの明日へのため」。

介護の現場での体験から生まれた唄が、聞く人それぞれ的人生体験に重ね合わされて心に染み渡ったのではないかと思います。

講演後に長倉先生から「坊さんは門徒さんのお見舞いに行つて」と勧められました。私も一心寺に帰ってきて二十六年、何度となく、みなさまとお会いしてきました。しかし、病気になる入院、入所されるとそれから何年もお顔を見ることもなく、次にお会いするのはご葬儀。寂しさと何もできない申し訳なさを感じていました。

長倉先生を見習ってお見舞いに伺えればと思いますので、来ても良いという方が居られましたらお声掛けください。



観音寺よるの街歩き「よるしらべ」。参道には恒例の有明浜の波模様。

新たな作品として、銀杏の木に地元の子供たちが作成した根上がり松や魚のイラストが映像作品として投影されました。

初日は親子連れで大賑わい。声明雅楽コンサートが行われた二日目は、急に風雨が襲い冬の寒さに。二十三名の僧侶が集い、親鸞聖人御誕生八五十年を記念して美しい声明、雅楽を響かせました。

よるしるべに参画してはや十年。来年に、再来年の瀬戸内国際芸術祭に向けて何か新しい試みができるばと思います。



初参式のご案内

第四子誕生を記念して初参式を執ります。小さいのが仏さまの子として早く育つことを願います。

参加無料。小学校六年生までのお子さまならどなたでも参加できますので、お気軽にお問い合わせください。

日時：一月十四日(日)十三時三十分～四十五分(報恩講に合わせて開催)

お知らせ

二月二十一日より、北海道旭川、富良野の六ヶ寺をご法話に回ります。お寺を留守にし、みなさまにはご不便をおかけしますが、ご理解ご協力のほどお願いいたします。

聞法大会のご案内

別紙の通り、聞法大会が催されます。「大下容子のワイドスクランブル」等、多くの番組でコメントーターを務める若新雄純氏を迎えて対談。当日はコーディネーターを務めさせていただきます。

会場は三木町と遠方ですが、ネット配信する予定ですので、ご興味のある方はご一報ください。後日、一心寺ホームページ等でもご案内いたします。

